

## 20. 豪族の連合によって政治を進めた古墳時代

古墳時代は日本における国家成立の基礎をつくった時代です。皆さんもご存じのことと思いますが、弥生時代には水田で稲作が始まり、やがて人々をまとめる有力な人物とその一族、すなわち豪族が各地に現れます。古墳時代になると、奈良県や大阪府の豪族を中心とした政治的なまとまりができました。奈良県とともに当時の中心地だった大阪府には、こうした理由から仁徳陵古墳や応神陵古墳などの巨大古墳がいくつも造られたのです。古墳は各地にも造られ、岡山県造山（つくりやま）古墳の墳丘長は 360m もあります。このような古墳の広がりから、当時の政治は大王と各地の豪族が連合しながら進めたと考えられます。

この連合による政治をやめて、中国にならった中央集権的な国家を目指したのが、飛鳥時代に活躍した推古天皇・聖徳太子・蘇我馬子たちです。当時、中国では長い戦乱の時代を経て、隋が統一を果たし、強大な力を誇っていました。推古天皇たちは隋に学びながら日本の国家づくりを推し進めたのです。この動きは天智天皇や天武天皇らにも引き継がれ、日本に初めての国家、すなわち律令に基づいた国家が誕生したのです。

日本の国家成立には、中国や朝鮮半島の先進的な文化や制度が欠かせませんでした。古墳時代、特に5世紀以降、金属加工や須恵器づくりの技術、乗馬の風習、政治の制度や文字などが積極的に取り入れられ、国家づくりの基礎になりま

した。日本の国家は、まさしく東アジアの交流のなかで生まれたのです。